

There 受動文の史的発達に関して*

本 多 尚 子

1. 導入

現代英語において、虚辞thereを伴う受動文には、(1)で示す主に2種類がある。

- (1) a. There are Grammars written for the French, Italian and Spanish Languages.
b. There is raised among them a great ambition.

(1a)は、虚辞+be動詞+DP+受動分詞+PPの語順であり、(1b)は、虚辞+be動詞+受動分詞+PP+DPの語順である。特に、現代英語では(1a)の用法の方が[§](1b)の用法よりも生起頻度が高い。

他方、通時的視点から見ると、常に(1a)の用法の方が(1b)の用法よりも生起頻度が高かったわけではない。むしろ、宇賀治(2000: 325)は、『受動態動詞句はMEまで通例(...)一塊りとして主語名詞句の前に配置された』と述べ、(2)の例文を挙げている。

* 本稿は、田中智之氏(名古屋大学)との共同研究の成果の一部をまとめたものである。本稿執筆にあたり貴重な御指摘・御助言をくださった匿名査読委員及び編集委員長の野村忠央氏に、記して謝意を表す。言うまでもなく、本稿に残された不備と誤謬については、すべて筆者の責任に帰する。

(2) And anone there was sente unto them two knyghtes of worship,

(a 1470 Malory Works 21.20-21)

(ほどなく彼らの許へ気高い騎士が二人遣わされた。)

(宇賀治 2000: 325)

(2) は、(1b) と同様、虚辞 + be 動詞 + 受動分詞 + PP + DP の語順であり、すなわち、宇賀治の指摘が正しければ、少なくとも古英語期から中英語期までは、(1b) の用法の方が (1a) の用法よりも生起頻度が高かったと考えられる。さらに、宇賀治 (2000: 325) は、『EModE以降は (...) 主語名詞句がbe動詞と過去分詞の間に介在することが一般的となった』とも指摘している。現代英語で生起頻度の高い (1a) の用法も、ここで指摘されているような主語名詞句がbe動詞と過去分詞の間に介在する用法に属する。

言い換えると、there 受動文は英語史を通じて何らかの統語変化を経験し、その結果として、宇賀治 (2000) が指摘するような語順変化が生じたと考えられる。

さらに、もう1つ興味深い言語事実がある。それは、古英語期より既に存在し中英語期半ばから後半にかけて多く観察されたが、現代英語ではほぼ廃れた (3) の用法の存在である。(現代英語で (3) の用法が存在しない理由に関しては、3節の議論を参照。)

(3) (...) þere coude be founde no defaute in hem (...)

(...) there could be found no default in him (...)

(CMCAPCHR, 51. 586: M4)

(3) は、虚辞 + be 動詞 + 受動分詞 + DP + PP という語順であり、受動分詞句と PP の間に DP が介在しているのがその特徴である。

There 受動文に関する (1b) から (1a) への主流語順の変化及び (3) の用法の衰退に関し、一部の通時研究での議論はあるものの、それらに関する史的コーパス調査などは、私の知る限り十分には行われていない。先程言及した宇賀治 (2000) においても前述のような変化の存在は指摘しているものの、(1b) から (1a) への主流語順の変化がより正確には何世紀頃生じたのか、また、その前後で2種類の構文の生起頻度はどのように変化して

いったのかなどについて資料に基づいた言及はない。第2の問題は、当該の生起頻度の変化が生じるメカニズム、すなわち、there 受動文の通時的発達のメカニズムが理論的に明示化されていないことである。とりわけ、古英語期から後期中英語期にかけて可能であった“虚辞 + be 動詞 + 受動分詞 + DP + PP”の語順がなぜ不可能になるのか、そのメカニズムは明らかではない。また、第3の問題として、そのようなメカニズムが生じた動機が不明であることも挙げられる。

本稿の目的は、there 受動文の通時的発達に関する自らの史的コーパス調査結果を提示・分析することにより、先に提示した第1の問題、(1b) から (1a) への主流語順の変化がより正確には何世紀頃に生じたのかを明らかにすることである。また、第2、第3の問題に関しては、there 受動文の主流語順の変化の時期及び“虚辞 + be 動詞 + 受動分詞 + DP + PP”語順の衰退に着目し、Holmberg (2001) によって提案される ParticipleP (PrtP) を用いた分析可能性を今後の研究展望として述べるに留める。

本稿の構成は以下のとおりである。2節では、there 受動文の先行研究を概観し、問題点を指摘する。3節では、史的コーパスを用いた there 受動文に関する調査結果を提示し、(1b) から (1a) への主流語順の変化がより正確には何世紀頃生じたのかを明らかにすると共に、その変化の特徴を分析する。また、there 受動文の通時的発達過程及びその動機の解明のため、PrtP を用いる分析可能性を今後の研究展望として述べる。4節はまとめである。

2. 先行研究

宇賀治 (2000) では、there 受動文の無標の語順は、(i) 古英語期から少なくとも中英語期の終わりまでは“虚辞 + be 動詞 + 受動分詞 + PP + DP”であったが、(ii) 中英語期の終わりから初期近代英語期初頭に“虚辞 + be 動詞 + DP + 受動分詞 + PP”に取って代わられたと主張している。詳しくは3節で言及するが、彼の (ii) の主張は“概観として”妥当である一方、変化の生じた時期が中英語期の終わりから初期近代英語期初頭と幅を持たせて設定されており、当該変化がより具体的には何世紀頃であったのかは明らかではない。このことが、先行研究において同構文における通時的変化の動機やメカニズムを十分に明示化できない要因の1つだと考えられる。ま

た、(i) の主張に関しては、少なくとも3節のコーパス調査の結果を見る限り正しくない。また、1節で言及したように、彼は、古英語期から中英語期前半にかけて一定頻度観察される“虚辞 + be 動詞 + 受動分詞 + DP + PP”のパターンについては全く言及していない。

3. there 受動文に関するコーパス調査

2節で指摘したように、先行研究がthere 受動文に関する通時的変化の動機とメカニズムを十分に明示化できなかった1つの要因として、その主流語順の変化が生じた正確な時期が特定されていないことが考えられる。当該時期を同定するためには、質及び量ともに十分な言語データを包括的に調査する必要があることから、本研究では古英語から後期近代英語までを扱った史的コーパス調査及び分析を行った。

本調査では、(4) で示す4つのコーパスを用いた¹。

- (4) The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose (YCOE)
- The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English Second edition
(PPCME2)
- The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (PPCEME)
- The Penn Parsed Corpus of Modern British English (PPCMBE)

また、特に古英語期から中英語期にかけては、there 受動文の語順として主要な3種類の語順以外にも多様な語順が含まれる可能性があったため、(5) のqueryを用い、(虚辞) thereを含む例文を全て抽出した後、1例ずつ文脈を確認し、there 受動文の例であるか否か及び該当例の場合にはその語順をいくつかのサブカテゴリーに分類した。

- (5) a. (YCOE 用) query: +T+ar|+t+ar|+D+ar|+d+ar exists
- b. (PPCME2, PPCEME, PPCMBE 用) query: EX exists

特に、本研究では、(1) 及び (3) の例文で示されるような前置詞句 (PP) つきのthere 受動文の語順のみに着目する。(1) 及び (3) のように、虚辞、

be動詞、受動分詞、PP、DPの5つの基本要素を含む語順パターンだけでも実に50種類にも及ぶ語順パターンが観察されたが、そのほとんどは生起頻度が非常に少なく、複数の時代区分にわたり一定頻度存在する語順は、(1) 及び (3) の3種類の語順パターンであった。

また、当該語順パターンの生起頻度の通時的变化を明らかにするため、50万語辺りのトークン頻度を算出した。その結果を表1 及び図1 としてまとめると。

表1 there 受動文の主な3種類の語順パターンの生起頻度 (50万語辺り)

語順パターン	O1	O2	O3	O4	M1	M2	M3	M4
虚辞 + be動詞 + DP + 受動分詞 + PP	0	2.38	3.23	0	2.56	5.32	6.48	25.89
虚辞 + be動詞 + 受動分詞 + PP + DP	0	0	3.88	0	2.56	0	3.89	23.07
虚辞 + be動詞 + 受動分詞 + DP + PP	0	0	5.82	0	0	0	3.89	26.91

E1	E2	E3	L1	L2	L3
46.67	40.58	42.47	39.55	26.55	38.58
17.61	15.12	6.46	8.18	3.32	16.53
7.04	3.18	4.62	0	1.66	0

図1 there 受動文の主な3種類の語順パターンの生起頻度 (50万語辺り)

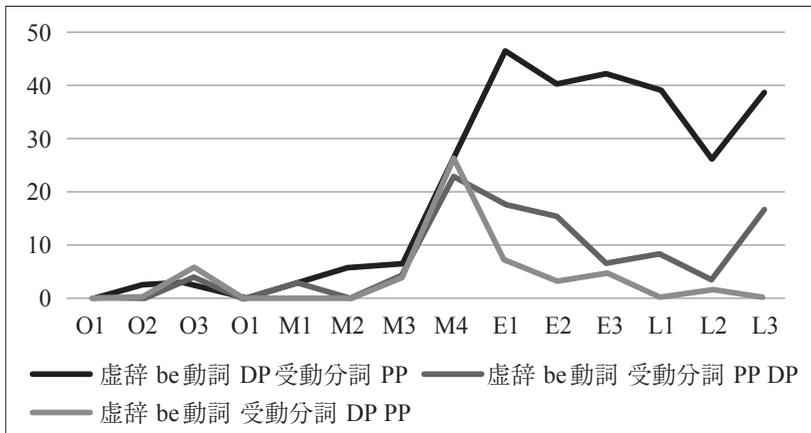


表1及び図1から明らかとなるように、M4 (1420-1500) までは3種類の語順パターンの生起頻度にそれほど差は見られない。現代英語と同様に、虚辞 + be動詞 + DP + 受動分詞 + PPの語順が他の語順よりも優位となるのは、E1 (1500-1569) 以降にかけてであることが分かる。また、3種類の語順のうち、“虚辞 + be動詞 + 受動分詞 + DP + PP”の語順は、他の2つの語順と比べて、初期近代英語期初頭に既に頻度を著しく減らし、特に後期近代英語期に至ってはほぼ観察されなくなっていることも分かる。“虚辞 + be動詞 + 受動分詞 + PP + DP”の語順の方が現代英語まで頻度はそれほど高くないものの存続している理由は、外置 (extraposition) などの右方移動が関係していると考えられる (Chomsky (2001) を参照)。特に、Chomsky (2001) では、現代英語特有の音韻部門で働く規則として、主題化／抜き出し規則 (Thematization/Extraction rule (Th/Ex)) を仮定し、現代英語では、当該規則により受動態動詞の目的語はその基底生成位置に留まり音声化されることは許されず、そのため、受動分詞を越えて左方移動するか (“虚辞 + be動詞 + DP + 受動分詞 + PP”の語順)、PPを越えて右方移動するか (“虚辞 + be動詞 + 受動分詞 + PP + DP”の語順) のどちらかのパターンのみが派生されるとしている。本稿では、後者に関し、DPが焦点化された要素あるいは重名詞句である場合に限り、DPの右方移動が起こり、“虚辞 + be動詞 + 受動分詞 + PP + DP”という有標の語順が、“虚辞 + be動詞 + DP + 受動分詞 + PP”という無標の語順から派生されると考える。自らが初期近代英語期以降の“虚辞 + be動詞 + 受動分詞 + PP + DP”の語順を含む例文を観察した結果、そのほとんどが重名詞句であり、中には、(6) で示されるように、PPとDPの間にコンマ (,) 等が置かれている例も存在した。

- (6) (...), there is often left in the constitution after fevers, an acrimonious state of the juices. (LIND-1753, 286.285: L1)

上記コーパス調査の結果、第1の問題、そして第2の問題の一部が解決した。すなわち、there受動文の主流語順の変化が生じた正確な時期及び各語順の生起頻度の変化が明示化されると共に、現代英語まで存続している“虚辞 + be動詞 + 受動分詞 + PP + DP”の語順についてはChomsky (2001) の主題化／抜き出し規則に従う随意的な重名詞句転移で生じる有標語順で

あると分析され、当該語順が初期近代英語期以降、主流語順ではないが可能な語順パターンとして存続している理由が理論的に明示化された。

しかしながら、“虚辞 + be 動詞 + DP + 受動分詞 + PP”の語順がなぜそしてどのようなメカニズムでE1期以降主流語順となったのか、どのようなメカニズムで現代英語では許されない“虚辞 + be 動詞 + 受動分詞 + DP + PP”の語順が古英語期から後期中英語期にかけては許されていたのか、そして、なぜE1期以降そのメカニズムが利用できなくなったのかは明らかではない。これらの変化に関する動機とメカニズムが解明されない限り、there 受動文の通時的発達過程のメカニズム及びその動機が明示化されたとはいえず、本稿で指摘した第2及び第3の問題が解決したとはいえない。本稿の以降の部分では、この第2及び第3の問題を解決できる可能性のある理論として、Holmberg (2001) によって提案された Participle 主要部 (Prt) 及び PrtP を援用した分析可能性を示す。

実際に there 受動文のデータを観察していく前に、Prt 及び PrtP に関する先行研究の内容を整理する。Holmberg (2001) では、受動文一般が PrtP 構造を含んでいると仮定し、その主要部 Prt には [±φ] 素性、[±EPP] 素性の組み合わせから理論的に次の4タイプ、すなわち、(a) Prt が φ 素性も EPP 素性も持つ場合、(b) Prt が φ 素性は持つが、EPP 素性を持たない場合、(c) Prt が φ 素性を持たないが、EPP 素性を持つ場合、(d) Prt が φ 素性も EPP 素性も持たない場合が存在する可能性を示している。Holmberg 自身は、これらの Prt 及び PrtP を利用し、アイスランド語、英語、デンマーク語、ノルウェー語 (方言を含む)、スウェーデン語の受動文の通言語的差異に理論的説明を与えているが、本稿では、これらの Prt 及び PrtP を援用し、英語の there 受動文の通時的差異を説明できる可能性を示す。

まず、古英語期から後期中英語期のデータを観察する。先のコーパス調査で示したように、当該時期には主に以下の3種類の語順を持つ there 受動文がほぼ同程度の生起頻度で観察される。(7)–(9) が古英語、(10)–(12) が中英語の例文である。

古英語期

- (7) “虚辞 + be 動詞 + DP + 受動分詞 + PP”

Þær wæs micel wæl geslagen on ægbere healfe,
there was many the dead killed on both sides
'There were many of the dead killed on both sides,'

(coorosiu, Or_4: 7.99.6.2044: O2)

- (8) “虚辞 + be 動詞 + 受動分詞 + PP + DP”

Þær wæron gehælede þurh ða halgan femnan fela adlige menn, (...)
there were healed through the blessed woman many sick men
'There were healed through the blessed woman many sick men, (...)'

(coaelive, ÆLS_[ÆAethelthryth]:113.4208, O3)

- (9) “虚辞 + be 動詞 + 受動分詞 + DP + PP”

and þær wearð siþþan aræred swiðe mære cyrce Gode to wurðmynte
and there was afterwards raised much famous church God to honor
'and there was afterwards a very famous church built in honor of God'

(coaelive, ÆLS_[Oswald]: 40.5410: O3)

中英語期

- (10) “虚辞 + be 動詞 + DP + 受動分詞 + PP”

and þer byeþ moche uolk y-do to dyape and to zenne.
and there are many folk done to death and to sin
'and there are many folk done to death and to sin.'

(CMAYENBI, 47.813: M2)

- (11) “虚辞 + be 動詞 + 受動分詞 + PP + DP”

For he multiplied so bokes þat þere were founde in his librarie at
for he multiplied so books that there were found in his library at
Alisaundre lxx þousand bokes.
Alexander's 1-- thousand books
'For he multiplied so books that there were found in his library at
Alexander's 1-- thousand books.'

(CMCAPCHR, 43.352: M4)

(12) “虚辞 + be 動詞 + 受動分詞 + DP + PP”

And there was made a grete hale in the palyssse,
and there was made a great hall in the palace
'And there was a great hall made in the palace.'

(CMGREGOR, 96.22: M4)

特に、注目すべきは (9) と (12) で示される“虚辞 + be 動詞 + 受動分詞 + DP + PP”の存在である。当該語順は VP 内に基底生成された DP がどこにも移動されていないことを示している。すなわち、これらの事例は当該時期の PrtP の指定部への義務的な移動は存在しないことを示している。さらに、Pintzuk (1999) の二重基底部仮説を採用した場合、(7) と (10) の語順も PrtP の指定部へと VP 内の要素を移動させることなく説明することが可能である。(8) と (11) の語順が示しているのは、DP が文末へ右方移動されるという事実のみである。従って、(7)-(12) の例文の中で、PrtP 指定部への VP 内からの DP の移動を積極的に支持する証拠はない。そして、Prt が DP との ϕ 素性の一致を示している証拠となる形態的のマーカも存在していない。従って、本稿では、(13) で示されるように、古英語期から後期中英語期にかけての受動文は、 ϕ 素性も EPP 素性も持たない Prt からなる PrtP を含む構造であると仮定する。

(13) (a) (DP-V_{pp}-PP)

Þær wæs [_{PrtP} Prt [_{VP} [_{VP} [_{DP} micel wæl] [_V geslagen]]] on ægþere healfē]]

(b) (V_{pp}-DP-PP)

there was [_{PrtP} Prt [_{VP} [_{VP} [_V made] [_{DP} a grete hale]]] in the palyssse]]

また、VP 内の DP の格付与に関しては、Chomsky (2001) の Agree に基づく分析を採用し、当該 DP は T の ϕ 素性と一致し主格を得ると仮定する。他方、T の EPP 素性は虚辞が満たすので、VP 内の DP は VP 外へと左方移動はされないと分析される。

さらに (13) の構造において、DP に随意的な重名詞句転移がかかった場合には、いずれの構造も“虚辞 + be 動詞 + 受動分詞 + PP + DP”という語順を派生し、古英語期から中英語期にかけて観察される 3 種類の語順が導か

れる。

興味深いことに、当該時期において、there受動文以外にも、TPの指定部への主格主語の義務的な移動を伴わない構文が存在する。例えば、(14)の非人称受動文がその1例である。

- (14) be ðam is þus awriten
about that is thus written
'about that it is thus written' (ÆCHom I, 282. 17) (Ohkado 1998: 64)

(14)は、主格主語がその規範的位置とされるTPの指定部に現れていないが、当該時期において他の非人称構文と同様、一定の生起頻度を持つ文法的な文である (Breivik (1990) を参照)。言い換えると、非人称受動文の存在は、主格主語がTPの指定部に現れなくてもよいという重要な肯定証拠の1つとなりうると同時に、間接的ではあるが、主格主語を付与されるべきDPがVP内の元位置に留まる可能性を示唆しうる。

近代英語期になると、there受動文の主流語順は、(15)及び(17)の“虚辞 + be動詞 + DP + 受動分詞 + PP”となる。他方、有標語順として(16)や(18)で示される“虚辞 + be動詞 + 受動分詞 + PP + DP”は存在するが、“虚辞 + be動詞 + 受動分詞 + DP + PP”語順はほぼ消失する。(15)-(16)は初期近代英語、(17)-(18)は後期近代英語の例文である。

初期近代英語期

- (15) “虚辞 + be動詞 + DP + 受動分詞 + PP”

There are two papist offisirs put into their places.

(ALHATTON2-E3-P1, 63.17: E3)

- (16) “虚辞 + be動詞 + 受動分詞 + PP + DP”

And the more, because there is met in your Maiesty a rare Coniunction,
aswell of diuine and sacred literature, as of prophane and humane; (...)

(BACON-E2-P1, 1, 2V.21: E2)

後期近代英語期

(17) “虚辞 + be 動詞 + DP + 受動分詞 + PP”

There was one taken at the same time much smaller, but marked exactly like the great one. (ALBIN-1736, 14.362: L1)

(18) “虚辞 + be 動詞 + 受動分詞 + PP + DP”

and that there shall constantly be kept in the office of the accountant-general for the time being, within the city of London, a book or books, wherein (...) (STATUTES-1805, 45, 554.95: L2)

後期中英語期末から初期近代英語期初頭において、V-to-I 移動及び V-to-C 移動が消失したことで VP 内の基底語順が Head-initial の語順である VO に固定化される。その結果、VP の基底語順が OV 語順となっている前述の (13a) の構造が消失する。

重要なのは、同時期に Prt 主要部の性質にも変化が生じたと考えられることである。その変化とは、Prt が持つ EPP 素性の義務化である。すなわち、VP 内の基底語順は VO であるが VP 内から目的語 DP が V を越え、PrtP の指定部に移動するようになったため、“虚辞 + be 動詞 + DP + 受動分詞 + PP” の語順が主流語順になったと考えられる。このような義務化の動機の正確な解明は今後の課題とするが、その要因の 1 つとして、古英語期から後期中英語期まで観察されていた非人称受動文の消失が考えられる。前述したように、非人称受動文は“主格主語が TP の指定部に現れなくてもよい”という重要な肯定証拠となり、間接的にはあるが、主格主語を付与されるべき DP が VP 内の元位置に留まる可能性を示唆するものとなっていた可能性がある。そして、非人称受動文は、他の非人称構文と共に 1500 年頃に急速に消失したとされる。非人称受動文が“主格主語が TP の指定部に現れなくてもよい”という重要な肯定証拠となり、間接的に、主格主語を付与されるべき DP が VP 内の元位置に留まる可能性を示唆するものであったという仮説が正しければ、当該構文が消失したことで、“主格主語が TP の指定部に現れなくてもよい”という肯定証拠が減ると共に、主格主語を付与されるべき DP が VP 内の元位置に留まる可能性の間接的な示唆も弱まったと考えられる。その結果、Prt 主要部が持つ EPP 素性の値が + に設定されるようになり、there 受動文に関しては (19) の語順パターンが主流語順となっ

たと推測される。

近代英語期以降

(19) (DP-V_{pp}-PP)

there are [_{PrtP} two papist offisirs_i Prt [_{VP} [_{VP} put _{t_i}] into their places]]
[+ EPP]

さらに(19)の構造において、DPに随意的な重名詞句転移がかかった場合には“虚辞+be動詞+受動分詞+PP+DP”という語順が派生され、近代英語期以降に観察されるthere受動文の2種類の語順が導かれる。

1500年頃にPrtのEPP素性の値が+に設定されるようになったことを裏付ける独立した証拠を見つけ提示することは今後の課題とするが、The men were all killed.のようなbe動詞と受動分詞の間に遊離数量詞が現れている事例の有無及び、当該事例が有る場合にはその出現時期を特定する史的コーパス調査並びにOED等の文献調査を行い、1500年頃にTPとVPとの間にEPP素性を持った主要部を含む何らかの投射(本稿で提案するPrtP)が存在する証拠とすることを考えている。

4. まとめ

本稿では、史的コーパス調査及び分析を行い、there受動文の主要な3種類の語順の生起頻度の変化を明示化し、特に、古英語期から15世紀にかけては3種類の語順は競合しており有標/無標語順の区別は確立しておらず、現代英語で無標の語順となっている“虚辞+be動詞+DP+受動分詞+PP”は、1500年頃にその優位性を獲得したことを示し、there受動文の通時的発達に関する動機とメカニズムの明示化に関しても研究展望を示した。

注

1. それぞれのコーパスの時代区分は以下の通りである。YCOEの時代区分はO1 (450-850)、O2 (850-950)、O3 (950-1050)、O4 (1050-1150)である。PPCME2の時代区分は、M1 (1150-1250)、M2 (1250-1350)、M3 (1350-1420)、M4 (1420-1500)である。PPCEMEの時代区分は、E1 (1500-1569)、

E2 (1570-1639)、E3 (1640-1710) である。PPCMBE のもともとの時代区分は、L1 (1700-1769)、L2 (1770-1839)、L3 (1840-1914) である。しかしながら、便宜上の理由で、ここでのデータは以下の修正された時代区分、すなわち、L1 (1710-1779)、L2 (1780-1849)、L3 (1850-1920) に基づいて分類されている。

参照文献

- Breivik, Leiv Egil (1990) *Existential There: A Synchronic and Diachronic Study*. Oslo: Novus.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase." In Michael Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*, 1-52. Cambridge, MA.: MIT Press.
- Holmberg, Anders (2001) "Expletives and Agreement in Scandinavian Passives." *Journal of Comparative Germanic Linguistics* 4: 85-128.
- Ohkado, Masayuki (1998) "On Subject Extraposition Constructions in the History of English." *Studies in Modern English* 14: 53-78.
- Pintzuk, Susan (1999) *Phrase Structures in Competition: Variation and Change in Old English Word Order*. New York: Garland.
- 宇賀治正朋 (2000) 『英語史』(現代の英語学シリーズ 第8巻) 東京: 開拓社.
(北海道教育大学札幌校)
honda.shoko@s.hokkyodai.ac.jp